

## 福本和夫と『抜け参りの研究』

桂島 宣弘

福本和夫は、何故に「抜け参り」に関心を寄せたのであろうか？そうした興味に導かれて、吉岡永美『抜け参りの研究』を再読した。実は、今から三十年近く前、初めて近世後期の思想研究に道を定めたとき、先行研究として福本の著書と知らずに触れて以来の読書となるのか。『「おかげまいり」と「ええじやないか」』（岩波新書）の著書で知られる藤谷俊雄は、わたくしが立命館大学で日本思想史の講義を受けた恩師であるが、この書については福本のものとは知らなかったかの如くであるから、まして当時二十代前半であったわたくしなど、それと知らなかったのは無理からぬことであろう。さらにいえば、当時は藤谷も含め、立命館大学は未だ講座派マルクス主義の全盛時代で、福本は「講座派以前の」セクト主義的マルクス主義の権化の如く否定的に定義されており、福本の後年の豊かな人文学研究など、想像だにできなかった雰囲気は支配的だった（例外は、当時から先見的に福本の重要性を捉えていた畏友の小島亮ぐらいか）。いずれにしても、戦前・戦時中の思想史

研究は、見解を外せば、史料的には戦後のものよりも見るべきものが多い、と同じく日本思想史の手ほどきを受けた衣笠安喜から教えられていたこともあり、当時の読書ノートを繙くと「吉岡氏の著書は史料的には大変よく整理されている」とある。そして、それは今回再読してみても、ほとんど基本的文献史料は渉猟しているということに、今度は福本と知っている分だけ、驚いた次第だ。これらも「獄中学」の成果なのであろうか。

現在の福本研究などによれば、本書は十四年間の獄中生活を終え、未だ保護観察期間中、郷里の鳥取県北条町から上京した一九四二年～四三年、柳田国男などから史料の提供も受けて書かれたものということだが、戦後に公にされた『日本ルネッサンス史論』は、獄中で構想されていたというから（その最初の着想は一九二四年までのヨーロッパでの在外研究生活時に遡るともいう）、その構想の一翼に本書が存在していたことも間違いなからう。

今回通読して気づかされたのは、福本の明治維新変革の民衆的底流への強いこだわりである。いうまでもなく、そうした視点が戦後漸くにして歴史学で市民権を得るに至るのは、講座派批判が表出し始めた一九六十年代後半に入ってからだ。福本は戦前～戦時中にその着想を得ていたことになる。本書において吉岡＝福本が強調しているのは、抜け参りやお陰参りが、「自然発生的・民衆的な国体への自覚運動」であったということで、藤谷はこれを「戦中の皇国史観」と切って捨てた。だが、そうした表現を除くならば、実はこの著書は、「唯物史観」に立ったものであることは明らかだ。福本の「唯物史観」については、コミンテルンはいかに及ばず、ルカーチやフランクフルト学派との関連まで明らかになっている現段階において、素人のわたくしなど到底口出すところではない。ここでは、本人は「西洋流史観」として批判しているものの、実は抜け参りを社会情勢との関連で捉える冷徹な目は失われていないことと、その対極に国学者の抜け参りに対する冷めた姿勢も捉えられていて、国学に先んずるものとして抜け参りを位置づけている点には、やはり階級的な視点が存在しているのではないかと、ということののべたまでのことである。

しかも、かれが「西洋史的、唯物的解釈法は本書の採らざる所」とのべているのも、決してマヌーバーとのみ捉えられるものでもあるまい。現在の福本研究がどのようにのべているのかは知らないが、本書全体には総体としての「唯物史観」、そして考証主義的方法が

認められるものの、その史眼に注目するならば、(いわゆる福本イズム以来とわたくしは思っているが)「社会変革過程の表式」の「意識過程」を、明治維新以前の文化・宗教過程に探ろうとした試みであったというべきか。そして、その表現は「皇国史観的」ではあっても、「我が抜け参運動と彼れの十字軍。我が国学運動と彼れのヒューマニズム乃至宗教改革なるものとの相違」について、それを十分に明らかにする必要がある、とのべられているのは、やがて『日本ルネッサンス史論』に結実する視点であって、明治維新时期以前の史的過程、とりわけ文化史・社会史的過程の底流を具体的に描くことで、恐らくは福本が獄にあった間に講座派、やがて「正統派」となるグループの、そのコミンテルン的な明治維新論に根本的に疑義を提示したもののなのではあるまいか。

このように考えてみると、戦後確かにお陰参り研究は、地方史研究などで飛躍的に史料が蓄積され、あるいは絵馬や灯笼、伝承に対する研究も深まったわけだが、福本の研究は、何故にそれを研究しなければならないのか、その根本のところを今なお問うているものと位置づけられよう。